



愛隣幼稚園.....

園だより

.....14.11月号

子どもたちは大きくなる

台風と台風の合間を見事にすり抜けて、今年の運動会は気持ちのいい秋晴れの中、行うことができました。子どもたちはもちろんのこと、大人たちも夢中になって楽しむ運動会。愛隣ならではの自負しています。私自身も、自分の子どもが愛隣にお世話になり、初めて運動会に参加した時に「あ～楽しかった！」と心から思っていました。大人になり親になって子どもの運動会が楽しいなんて・・・不思議な感じがしましたが、今年もまた、走りまわってくれた役員の皆さんはじめ、たくさんのお手伝いをいただいたお家の皆様からも、「楽しかった。」との感想を聞かせていただきました。卒業した子どもの親たちまで楽しみにやってくる運動会を、また来年もと思います。

さて、そんなビッグイベントがひとつ終わって、愛隣の子もたちもビッグに変身し始めています。これはたんぼぼ組に顕著に表れています。幼稚園という環境に慣れること、お家の人と離れ仲間の中で過ごすということ、初めてがいっぱいの中での毎日をおそらく必死にやってきた1学期でした。2学期になり少し余裕ができました。運動会は初めてでしたが、そこで繰り広げられる様々なことは彼らの視界に入るようになりました。ばら組やゆめ組の姿が大きな刺激になりました。今、たんぼぼ組は“野外劇ごっこ”に夢中です。自分たちが演じた役ではなく、大きい組のやっていたことを自分たちもやってみたいという思いが溢れ弾けています。「ロボットになれる！」・・・あんなことも、こんなこともできるみたいだぞ。自分もやってみたい！好奇心や憧れが子どもたちを大きくします。あそびは受け継がれていきます。私も幼い頃の憧れを思い出します。近所のかっこいいお姉さんやお兄さんに憧れてくっついて歩き、私もあんなことをやってみたいと思い、それができるチャンスを狙っていました。今は近所にそんなモデルはないかもしれませんが、幼稚園にそれがあるといふことには大きな意味があります。

たんぼぼ組がこんな様子ですから、ばら組はもっともっとしっかり見ていたはず。ゆめ組の頑張る姿を。ばら組になってたんぼぼ組の時より“力いっぱい”とか“頑張る”とか“仲間と力を合わせて”ということがわかるようになりました。実際に、運動会を通してその経験もしました。だからこそ、ゆめ組の姿は目に焼き付いています。特に〈リレー〉で頑張る大きい組の姿は心に深く刻まれていることでしょう。“速いなあ”“すごいなあ”“真剣ってこのこと？”こんなことを感じていたでしょうか。それで、この経験は感受性の強い子どもたちの中には『とてもドキドキすること』として残っていくような気がしています。生まれて数年の間に息をのむような真剣勝負を目の当たりにしたのです。それをやっているお兄さんやお姉さんたちをカッコイイとは思っても、自分にそれができるとは到底思えません。それ位、一杯の真剣勝負だからです。ばら組はこうして来年への力を心の内にそっと蓄えます。大きくなる蓄えです。

そしてゆめ組です。予想通り、リレーの始まりには真剣勝負にドキドキして尻込みする子どもたちの姿がありました。去年の彼らもうみ組の真剣勝負を見ていたからです。それでも日を重ね、一人じゃない、仲間がいると気づき始めた頃から、走りっぷりは変化していきました。頑張るのは自分自身のため、そして仲間のため。だからバトンを繋ぐ仲間に「最後まで諦めるな！」と声が飛びます。バトンを繋ぐ自分に「〇〇君の分も頑張る！」そう声をかけて駆けだしていきます。あの場でその声を聞く私の心が震えます。僅か6歳の子どもたちが心からそう思っている言葉だからです。駆けだしていく子どもたちの背中には惚れ惚れするほど大きな背中になっていました。走る姿はどの子も逞しく自信に満ちて、ほんの一月の間にこんなに変わるものかと感心します。2年あるいは3年の経験を重ね「自分はいいい！仲間はいいい！」と思えた運動会。目には見えない宝物がまたひとつ増えました。